

中学生の生活満足度と領域別ライフイベントの関係

—楽観的帰属を統制して—

吉武 尚美

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科)

問題と目的

中学生の生活全般への満足感と関連のあるイベントについてまだ具体的に示されていない。抑うつ研究ではライフイベントを達成領域と対人領域に分け、それぞれの正および負のイベントが示す抑うつとの関連が検討されてきた。なお、イベントと精神的適応状態の関係を検討する上ではイベントの解釈における個人差を考慮する必要がある。そこで本研究は、生活満足度と関連のあるイベント領域を明らかにする際に、両者の因果関係について楽観的帰属を統制した上で検証することを目的とした。対人領域のイベントが重要であること、および生活満足度とイベントの間に双方向の因果関係が成り立つだろうと予測した。

方 法

調査対象および手続き：区立中学1校の全生徒に対し、2008年7月(Time 1)と9月(Time 2)に質問紙調査を実施し、有効回答数323名(男子174名、女子149名/1年生94名、2年生110名、3年生119名)を分析対象とした。データの一致は性別と出席番号を用いて行った。調査内容：①ライフイベント 大学生用領域別ライフイベント尺度(高比良,1998)を基に中学生版の領域別ライフイベント尺度を作成し(各領域20項目、うち正負イベントが各10項目)、経験頻度を3件法で尋ねた。②生活満足度 Students' Life Satisfaction Scale (SLSS; Huebner,

1991)の日本語版を作成した。7項目の6件法尺度である。③楽観的帰属 子ども用帰属スタイル尺度(谷ら, 1999)。24項目、2件法。

結果と考察

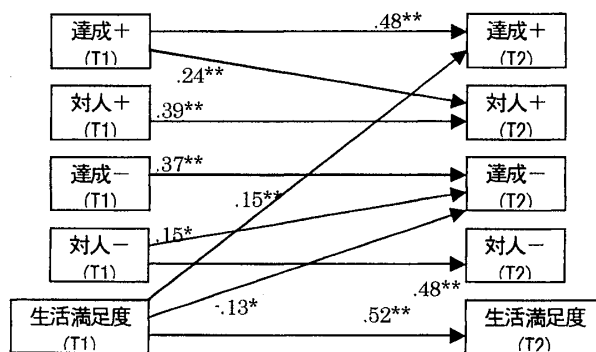
T2の生活満足度得点を従属変数として、学年と性別、T1の生活満足度得点と楽観的帰属、およびT2のイベント得点を独立変数とする階層重回帰分析を行った。この結果、T1の生活満足度の高さや楽観的帰属を統制した上で、T2の両領域の正イベントおよび対人領域の負イベントが生活満足度を有意に予測する変数となった(Table 1)。次に、生活満足度とイベントの因果関係を検討するため、2時点のイベントと生活満足度得点間で交差遅延効果分析を行った結果、T1の生活満足度の高さはT2の達成領域の正および負イベントと影響関係にあることが示唆された(Figure 1)。一方、T1の各イベントからT2の生活満足度を予測するパスはどれも有意ではなかった。

以上の結果から、生活満足度の高さは、正イベントを多く経験すること、対人関係での負イベントをあまり経験しないことと関連があり、さらに楽観的帰属の度合いにかかわらず、現在の生活への満足度が高いと、その後の達成イベントにおいてポジティブな経験をしやすいことが示された。生活満足度は中学生の自己実現に関する経験に重要な役割を果たすと推察された。

Table 1 生活満足度と従属変数とする階層重回帰分析結果

step	独立変数	R ²	ΔR ²	β
1	性別	.34	.34**	.05
	学年			.03
	生活満足度(T1)			.34**
2	楽観的帰属(T1)	.40	.06**	.17**
	イベント(T2)	.58	.18**	
	達成+			.22**
	対人+			.21**
	達成-			-.07
	対人-			-.20**

N=235, *p<.05, **p<.01 +:正のイベント -:負のイベント



χ²(59)=64.97, GFI=.96, CFI=.99, RMSEA=.03

Fig 1 ライフイベントと生活満足度間の交差遅延効果モデル